

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開2001-288039

(P2001-288039A)

(43) 公開日 平成13年10月16日 (2001.10.16)

(51) Int.Cl.<sup>7</sup>

A 6 1 K 7/025

識別記号

F I

A 6 1 K 7/025

キーワード\* (参考)

4 C 0 8 3

審査請求 未請求 請求項の数 6 O L (全 9 頁)

(21) 出願番号 特願2000-99121(P2000-99121)

(22) 出願日 平成12年3月31日 (2000.3.31)

(71) 出願人 000001959

株式会社資生堂

東京都中央区銀座7丁目5番5号

(72) 発明者 篠島 哲

神奈川県横浜市港北区新羽町1050番地 株

式会社資生堂第一リサーチセンター内

(72) 発明者 梶浦 砂織

東京都中央区銀座7丁目5番5号 株式会

社資生堂内

(74) 代理人 100088214

弁理士 生田 哲郎 (外1名)

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 口紅用組成物

(57) 【要約】

【課題】 透明感のある自然の口唇を維持しつつ、口唇のしわを目立たなくさせ、かつ使用性、長期保存安定性に優れた口紅用組成物を提供すること。

【解決手段】 透過干渉色が青色及至緑色で反射干渉色が赤色を呈する、外観色が肌色の酸化鉄被覆雲母チタン1〜30重量%と、屈折率1.45〜1.50の油分1〜30重量%とを配合してなる口紅用組成物。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 透過干渉色が青色及至緑色で反射干渉色が赤色を呈する、外観色が肌色の酸化鉄被覆雲母チタン1～30重量%と、屈折率1.45～1.50の油分1～30重量%とを配合してなる口紅用組成物。

【請求項2】 前記酸化鉄被覆雲母チタンの酸化鉄が、黄色酸化鉄である請求項1記載の口紅用組成物。

【請求項3】 前記酸化鉄被覆雲母チタンの酸化鉄が、数平均粒子径60～200nmの酸化鉄である請求項1または2記載の口紅用組成物。

【請求項4】 前記酸化鉄被覆雲母チタンの酸化鉄の被覆量が、酸化鉄被覆雲母チタンに対して0.05～5重量%である請求項1乃至3のいずれか一項に記載の口紅用組成物。

【請求項5】 前記酸化鉄被覆雲母チタンの雲母チタンが、二酸化チタンで被覆された雲母であり、その二酸化チタンの光学的膜厚が70～110nmである請求項1乃至4のいずれか一項に記載の口紅用組成物。

【請求項6】 屈折率1.45～1.50の油分が、マカデミアナッツ油脂脂肪酸コレステリル、重質流動パラフィン、オキシ酸エステル、水添ロジンイソステアリン酸グリセリルのいずれかである請求項1乃至5のいずれか一項に記載の口紅用組成物。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は口紅用組成物、特に、口唇の皺を目立たなくし、自然の仕上がりが見られる、使用性の優れた口紅用組成物に関する。

【0002】

【従来の技術】一般に口紅用組成物は、ワックス、各種液状油分、色材などから構成されている。近年、口紅用組成物には様々な機能が求められる傾向が強くなってきており、機能的原料と呼ばれる原料を配合することが多くなってきている。

【0003】一方、女性の唇に関する悩みには唇の荒れ、くすみなどとともに唇の皺、特に縦皺の多さも挙げられる。従来は、唇の縦皺等のしわを目立たなくさせることを目的として口紅にはラノリンなどの油分を配合したりしていた。

【0004】しかしながら、従来技術では縦皺等のしわを目立たなくさせることは充分でなく、ましてやラノリン類は酸化劣化に起因する悪臭の発生が認められており、特に口紅用組成物はその販売前後にわたって長期に保存される可能性があり、しかも唇という臭いを感じやすい部分に適用されるため、悪臭の発生は極めて重大な問題となっていた。

【0005】

【発明が解決しようとする課題】本発明は上記事情に鑑みなされたものであり、透明感のある自然の口唇を維持しつつ、口唇のしわを目立たなくさせ、かつ使用性、長

期保存安定性に優れた口紅用組成物を提供することを目的とする。

【0006】

【課題を解決するための手段】本発明者らは、前記課題を解決するため鋭意研究を行った結果、特定の外観色と干渉色をもった酸化鉄被覆雲母チタンと特定の屈折率の油分を組み合わせることで配合することにより、上記課題が解決されることを見出し、本発明を完成するに至った。

【0007】すなわち、本発明は、透過干渉色が青色及至緑色で反射干渉色が赤色を呈する、外観色が肌色の酸化鉄被覆雲母チタン1～30重量%と、屈折率1.45～1.50の油分1～30重量%とを配合してなる口紅用組成物である。

【0008】

【発明の実施の形態】以下、本発明の実施形態について説明する。本発明の口紅用組成物を構成する必須成分は、特定の酸化鉄被覆雲母チタンと特定の油分である。

【0009】まず、特定の酸化鉄被覆雲母チタンについて説明する。本発明における酸化鉄被覆雲母チタンは、透過干渉色が青色及至緑色で反射干渉色が赤色を呈する、外観色が肌色の酸化鉄被覆雲母チタンである。このような酸化鉄被覆雲母チタンは、雲母チタンに、数平均粒子径60～200nmの酸化鉄を、酸化鉄被覆雲母チタンに対して0.05～5重量%被覆することによって得られる。なお、前記雲母チタンは、二酸化チタンで被覆された雲母であり、その二酸化チタンの光学的膜厚は70～110nmである。また、外観色の肌色は、黄色酸化鉄を用いることによって得られる。

【0010】上記酸化鉄被覆雲母チタンは、通常公知の方法を用いて製造することができる。まず、基盤となる雲母チタンの製法としては、特公昭43-25644号公報に見られるような、硫酸チタニル、四塩化チタンなどのチタンの無機酸塩を雲母の存在下で中和法あるいは加水分解法によって分解し、含水酸化チタンあるいは二酸化チタンを析出させた後、大気中500～1000℃、好ましくは700～900℃の温度で焼成する方法が一般的である。その他、真空蒸着処理でも製造することができる。使用する雲母はどのようなものでもよく、例えば白雲母、黒雲母、金雲母、合成雲母などを挙げることができる。

【0011】次に、酸化鉄の被覆方法としては、例えば、塩化第一鉄、塩化第二鉄、硫酸第一鉄、硫酸第二鉄、硝酸第一鉄、硝酸第二鉄、シュウ酸第一鉄、シュウ酸第二鉄アンモニウム、硫酸第二鉄アンモニウム、リン酸第二鉄、クエン酸第二鉄、乳酸第一鉄、フマル酸鉄などの無機、有機鉄化合物の水溶液中に雲母チタンを添加した後、該雲母チタン分散鉄化合物の水溶液を一旦苛性ソーダ、苛性カリ、アンモニア水などのアルカリを用いてpH5.6～7.0、好ましくはpH6.0～6.5の範囲に調整して鉄化合物の一部を中和分解させ、含水

酸化鉄の粒子を雲母チタン粒子表面に析出させる。次に、この含水酸化鉄被覆雲母チタンを分散させた鉄化合物水溶液を加温して50～100℃、好ましくは80℃以上に昇温させた後、苛性ソーダ、苛性カリ、アンモニア水などのアルカリ水溶液を添加してpHを8.0～9.5に保ち、鉄化合物を完全に中和分解させて、これを150℃以上、好ましくは400℃以上で焼成することによって、先に雲母チタン粒子表面に析出させた酸化鉄を核とする酸化鉄被覆雲母チタンを製造することができる。また、該含水酸化鉄被覆雲母チタンを分散させた鉄化合物水溶液に、鉄化合物の中和分解に必要な当量以上の尿素を添加した後、これを攪拌しながら加温して50～100℃、好ましくは80℃以上に保ち、鉄化合物を完全に中和分解させ、これを150℃以上、好ましくは400℃以上で焼成することによって、先に雲母チタン粒子表面に析出させた酸化鉄を核とする酸化鉄被覆雲母チタンを製造することもできる。なお、尿素は鉄化合物と共に、反応の前に予め加えておくこともできる。

【0012】以下に、具体的な製造例を挙げる。

【0013】製造例1

シュウ酸第二鉄アンモニウム53.6重量部および尿素22.5重量部をイオン交換水2000重量部に溶解させ、これを0.1M苛性ソーダ水溶液でpH6.2に調整して得られた水溶液にドイツMerck社製の赤色干渉雲母チタン（テミロンスーパーレッド）100重量部を加えて、十分に攪拌して均一に分散させた。次に、この雲母チタン分散液を攪拌しながら加熱して、6時間沸騰させた。放冷後、濾過、水洗し、400℃で焼成して、肌色の外観色と赤色の鮮やかな反射干渉および緑色の鮮明な透過干渉をもつ微粒子酸化鉄で被覆された雲母チタン102重量部を得た。得られた微粒子酸化鉄被覆赤色干渉雲母チタンの表面を被覆している酸化鉄の粒度を調べるため、別に雲母チタンを加えずに上記と同一の条件下で酸化鉄を合成した。得られた酸化鉄の粒度をHiac/Royco社製レーザー回折式粒度測定機NICOMP270で測定したところ、数平均粒子径71nmであった。

【0014】本発明の上記酸化鉄被覆雲母チタンの配合量は、組成物全量中1～30重量%である。配合量が1重量%未満では、口唇の縦皺を目立たなくさせる効果を生じない。又、使用性もべたつき感がでて、しかも重くなるので好ましくない。一方、30重量%を超えて配合すると、口唇の縦皺はおさえられるものの、口唇の透明感がなくなり、自然の口唇感から離れてしまう。また、つやがなくなり、使用性も重くなる。

【0015】次に、特定の油分について説明する。本発明における油分は、屈折率が1.45～1.50の油分である。屈折率がこの範囲から外れると口唇の縦皺を目立たなくさせる効果を生じない。また、口唇のつやがなくなり、透明感も悪くなる。屈折率が1.45～1.5

0の油分の例としては、マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル、重質流動パラフィン、オキシ酸エステル、水添ロジンイソステアリン酸グリセリル等が挙げられる。

【0016】マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリルは、マカデミアナッツ油を加水分解して得られる脂肪酸とコレステリルアルコールとのエステル化合物である。エステル化は公知の手段により行うことができる。

【0017】重質流動パラフィンは、イソブテンとn-ブテンの共重合体において、末端の2重結合も含め水素添加した側鎖を有する飽和タイプの長鎖炭化水素の混合物である。重合度は重合条件を変えることで種々のものが得ることができる。本発明ではその入手の容易性や粘度等の観点から数平均分子量500～3000のものが好ましく用いることができ、さらに好ましくは700～1500である。特に1000付近のものが好適である。

【0018】オキシ酸エステルは、オキシ酸と脂肪酸アルコールとのエステル化合物である。これらを構成する成分であるオキシ酸は、ヒドロキシ酸ともいい、1分子中にカルボキシル基とアルコール性水酸基を持つ化合物をいう。本発明では、炭化原子数14～22のオキシ酸が好適に用いられる。具体的には、オキシラウリル酸、オキシミリスチン酸、オキシパルミチン酸、オキシステアリン酸、リシノール酸等が挙げられる。脂肪酸アルコールとしては、炭素原子数14～22の脂肪酸アルコールが好ましい。具体的には、セチルアルコール、ステアリルアルコール、イソパルミチルアルコール、オレイルアルコール、ベヘニルアルコール、2-ヘキシルデシルアルコール、2-オクチルドデカノール等が挙げられる。これらの組み合わせの中で、好ましいオキシ酸エステルは、オキシステアリン酸、特に12-ヒドロキシステアリン酸と2-ヘプチルウンデカノールとのエステルである。

【0019】水添ロジンイソステアリン酸グリセリルは、グリセリンが、水添還元されたロジン酸（アビエチン酸を主成分とする）及びイソステアリン酸でエステル化されたものである。特に、グリセリンのモノ還元ロジン酸（アビエチン酸を主成分とする）ジイソステアリン酸エステが好ましい。

【0020】これらの屈折率1.45～1.50の油分は、この範囲に入る油分の中から1種または2種以上を組み合わせで配合される。中でも、オキシ酸エステルが配合されるのが最も好ましい。

【0021】本発明の上記特定油分の配合量は、組成物全量中1～30重量%である。配合量が1重量%未満では、口唇の縦皺を目立たなくさせる効果や口唇の透明感、口唇のつや等の効果を発揮しにくい。又、使用時ののびも重くなる。一方、30重量%を超えて配合すると唇にべたべたした感じが生じ、使用時ののびも重くなり好ましくない。また、口唇の仕上がりが自然でなくな

る。例示した各油分の好適な配合量は、それぞれ単独で配合した場合は、マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリルは全組成物中1～30重量%、重質流動パラフィン全組成物中10～30重量%、オキシ酸エステルは全組成物中5～30重量%、水添ロジニソステアリン酸グリセリルは全組成物中5～20重量%が好ましい。

【0022】本発明口紅組成物には上記必須成分の他に、発明の効果を損なわない範囲で、必要に応じ、固形油分、液状油分、粉体、保湿剤、界面活性剤、顔料、酸化防止剤、防腐剤、紫外線防止剤、香料等を配合することができる。

【0023】これらの中で、固形油分としては、一般に化粧料等に用いられるものであれば何でもよく、固体油脂、ロウ類、炭化水素、高級アルコールが挙げられる。例えば、モクロウ、カカオ脂、硬化ヒマシ油等の固体油脂；カルナウバロウ、ミツロウ、キャンデリラロウ、ジョジョバロウ等のロウ類；ポリエチレンワックス、パラフィンワックス、セレシン、マイクロクリスタリンワックス等の炭化水素系ワックス類；ベヘニルアルコール、セタノール、パチルアルコール等の高級アルコール；シリコンワックス等が例示できる。これらの固形油分は、1種のみを用いてもよく、あるいは2種以上を組み合わせ用いてもよい。スティック状（棒状）の口紅用組成物を製造する場合には、保型剤として本発明組成物中5～25重量%程度配合させるのが好ましい。

【0024】上記必須成分以外の液状油分としては、皮膚安全性の高いものであれば、使用可能である。例えば、オリーブ油、アボガド油、ツバキ油、マカデミアナッツ油、月見草油、ホホバ油、ナタネ油、卵黄油、ゴマ油、ヒマシ油、サフラワー油、綿実油、大豆油、茶実油、コメヌカ油、胚芽油等の液体油脂類；スクワラン、流動パラフィン等の炭化水素油；イソステアリン酸イソセチル、2-エチルヘキサン酸セチル、2-ヘプチルウンデシルパルミテート、アジピン酸ジイソブチル、セバシン酸2-ヘキシルデシル、イソプロピルミリステート、2-オクチルドデシルオレエート、リンゴ酸ジイソステアリル、ジ-2-エチルヘキサン酸エチレングリコール、トリ-2-ヘプチルウンデカン酸グリセリド、グリセリルジイソステアレート、グリセリルトリイソステアレート、トリオクタン酸グリセリン、トリイソパルミチン酸グリセリン、トリ-2-エチルヘキサン酸トリメチロールプロパン、テトラ-2-エチルヘキサン酸ペンタエリスリトール等のエステル油類；ジメチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン等の鎖状シリコン油；オクタメチルシクロテトラシロキサン、デカメチルシクロペンタシロキサン等の環状シリコン油；トリグリセリン、フッ素変性油等が挙げられる。これら液状油分を単独で、あるいは2種以上を組み合わせ用いることが出来る。

【0025】

【実施例】次に実施例を挙げて本発明を更に詳しく説明する。本発明はこれらの実施例に限定されるものではない。配合量は重量%である。本発明者らは本発明の口紅組成物を検討するに当たって各種試験を行った。実施例に先立ちその効果試験方法及び評価基準について説明する。

【0026】〔口唇の縦皺〕口唇の縦皺が目立つ専門パネル（20名）に各実施例、比較例の口紅用組成物（試料）を使用してもらい、口唇の縦皺の様子を官能で下記の5段階の評価基準により評価してもらった。

<評価基準>

- 1：縦皺がほとんど目立たなくなった。（著効）
- 2：縦皺がかなり目立たなくなった。（有効）
- 3：縦皺の目立ち具合はあまり変わらない。
- 4：縦皺の目立ち具合は全く変わらない。
- 5：縦皺が目立つようになった。

（評価）

◎：16名以上の専門パネルが「有効」以上の評価をした。

○：11～15名の専門パネルが「有効」以上の評価をした。

△：6～10名の専門パネルが「有効」以上の評価をした。

×：0～5名の専門パネルが「有効」以上の評価をした。

【0027】〔口唇の透明感〕口唇の縦皺が目立つ専門パネル（20名）に各実施例、比較例の口紅用組成物（試料）を使用してもらい、口唇の透明感を官能で下記の4段階の評価基準により評価してもらった。

<評価基準>

- 1：透明感があり、仕上がりが自然である。（著効）
- 2：透明感がややあり、仕上がりがほぼ自然である。（有効）
- 3：透明感がややなく、仕上がりが不自然である。
- 4：透明感がなく、自然の仕上がりに程遠い。

（評価）

◎：16名以上の専門パネルが「有効」以上の評価をした。

○：11～15名の専門パネルが「有効」以上の評価をした。

△：6～10名の専門パネルが「有効」以上の評価をした。

×：0～5名の専門パネルが「有効」以上の評価をした。

【0028】〔口唇のつや〕口唇の縦皺が目立つ専門パネル（20名）に各実施例、比較例の口紅用組成物（試料）を使用してもらい、口唇のつやを官能で下記の5段階の評価基準により評価してもらった。

<評価基準>

- 1：つやが良い。

2：つやがやや良い。

3：つやが普通。

4：つやがやや悪い。

5：つやが悪い。

(評価)

◎：16名以上の専門パネルが「つやがやや良い」以上の評価をした。

○：11～15名の専門パネルが「つやがやや良い」以上の評価をした。

△：6～10名の専門パネルが「つやがやや良い」以上の評価をした。

×：0～5名の専門パネルが「つやがやや良い」以上の評価をした。

【0029】〔使用性1〕口唇の縦皺が目立つ専門パネル(20名)に各実施例、比較例の口紅用組成物(試料)を使用してもらい、口唇のべたつきを官能で下記の5段階の評価基準により評価してもらった。

<評価基準>

1：べたつかない。

2：ほとんどべたつかない。

3：べたつきが普通。

4：ややべたつく。

5：べたつく。

(評価)

◎：16名以上の専門パネルが「ほとんどべたつかない」以上の評価をした。

○：11～15名の専門パネルが「ほとんどべたつかない」以上の評価をした。

△：6～10名の専門パネルが「ほとんどべたつかない」以上の評価をした。

×：0～5名の専門パネルが「ほとんどべたつかない」以上の評価をした。

【0030】〔使用性2〕口唇の縦皺が目立つ専門パネル(20名)に各実施例、比較例の口紅用組成物(試料)を使用してもらい、口唇への塗布時ののびを官能で下記の5段階の評価基準により評価してもらった。

<評価基準>

1：軽いのびで使用性がよい。

2：やや軽いのびで使用性がよい。

3：のびが普通。

4：ややのびが重く使用性が悪い。

5：のびが重く使用性が悪い。

(評価)

◎：16名以上の専門パネルが「やや軽いのびで使用性がよい」以上の評価をした。

○：11～15名の専門パネルが「やや軽いのびで使用性がよい」以上の評価をした。

△：6～10名の専門パネルが「やや軽いのびで使用性がよい」以上の評価をした。

×：0～5名の専門パネルが「やや軽いのびで使用性がよい」以上の評価をした。

【0031】〔臭い〕口紅用組成物の加速劣化試験を実施し、臭い評価を行った。なお、加速劣化試験はCDM試験(Conductmetric Determination Method)により、酸化劣化誘導時間を測定することにより行った。

【0032】(定義)試料を反応容器に入れ加熱しながら乾燥空気を送り込む。酸化により生成された揮発性の分解生成物を水中に捕集し、その誘電率が急激に変化する折曲点までの時間を酸化劣化誘導時間(Induction Time)として求め、試料の酸化安定性の指針とした。

【0033】(方法)ランシマットE679型(メトローム社製)を用い、油脂一般試験法2.2.4.28.2-93(CDM試験)に基づいて測定を行った。測定温度は120℃、空気流量20l/hで測定した。

<評価基準>

○：酸化誘導時間が48時間以上

△：酸化誘導時間が20時間以上48時間未満

×：酸化誘導時間が20時間未満

【0034】表1～表4に示す処方により実施例及び比較例の口紅用組成物を常法により製造し、上記試験法及び評価基準に従って評価した。結果を併せて表1～表4に示す。

【0035】

【表1】

	実施例				比較例
	1	2	3	4	1
セリンワックス	12	12	12	12	12
マイクロクリスタリンワックス	1	1	1	1	1
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	残余	残余	残余	残余	残余
マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル	10	—	—	—	—
重質流動パラフィン	—	10	—	—	—
12-ヒドロキシステアリン酸2-	—	—	10	—	—

ヘプチルウンデシル					
水添ロジニイソステアリン酸グリセリル	—	—	—	10	—
黄色酸化鉄被覆雲母チタン	10	10	10	10	10
色材	5	5	5	5	5
口唇の縦皺	◎	◎	◎	◎	×
口唇の透明感（自然の仕上がり）	◎	◎	◎	◎	△
口唇のつや	◎	◎	◎	◎	×
使用性（べたつき）	○	○	○	○	○
使用性（のび）	○	○	○	○	○
臭い	○	○	○	○	○

【0036】なお、表1で、重質流動パラフィン（平均分子量1000のものを用いた（以下、特に断らない限り同じ）。また、黄色酸化鉄被覆雲母チタンは、製造例1のものを用いた（以下、特に断らない限り同じ）。

【0037】表1の結果より、屈折率1.45～1.50の油分と黄色酸化鉄被覆雲母チタンを含む本発明にかかる実施例1～4の口紅用組成物は、口唇の縦皺が目立たなくなり、透明感があり自然な仕上がりが見られ、口唇のつやもよいことが分かる。しかも、使用性、臭いも

ともに優れていることが分かる。

【0038】それに対して、黄色酸化鉄被覆雲母チタンと油分として屈折率が1.4437の本発明範囲外であるトリ-2-エチルヘキサン酸グリセリンを用いた場合（比較例1）、縦皺が目立たなくする効果はなく、透明感に欠けるものであった。なお、口唇のつやも全くないものであった。

【0039】

【表2】

	比較例				
	2	3	4	5	6
セレシンワックス	12	12	12	12	12
マイクロクリスタリンワックス	1	1	1	1	1
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	残余	残余	残余	残余	残余
マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル	10	10	—	—	—
重質流動パラフィン	—	—	10	—	—
12-ヒドロキシステアリン酸2-ヘプチルウンデシル	—	—	—	10	—
水添ロジニイソステアリン酸グリセリル	—	—	—	—	10
テミロンスーパーレッド	—	10	10	10	10
色材	5	5	5	5	5
口唇の縦皺	×	×	×	×	×
透明感（自然の仕上がり）	○	○	○	○	○
口唇のつや	○	◎	◎	◎	◎
使用性（べたつき）	×	○	○	○	○
使用性（のび）	×	○	○	○	○
臭い	○	○	○	○	○

【0040】表2で、テミロンスーパーレッドは、製造例1で用いた赤色干渉雲母チタン（メルク社製）である。

【0041】上記表2の結果より、屈折率1.45～

1.50の油分とともに本発明の範囲外の一般的な雲母チタンを配合した比較例3～6の口紅用組成物は、口唇の縦皺に対する改善効果は全くなかった。雲母チタンも配合されていない比較例2については、使用性にも問題

がでてきていることが分かる。

【0042】

【表3】

	比較例		実施例		比較例
	7	5	6	7	8
セリンワックス	12	12	12	12	12
マイクロクリスタリンワックス	1	1	1	1	1
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	残余	残余	残余	残余	残余
12-ヒドロキシステアリン酸 2-ヘプチルウンデシル	10	10	10	10	10
黄色酸化鉄被覆雲母チタン 色材	0.5 5	1 5	20 5	30 5	40 5
口唇の縦皺	×	○	◎	◎	◎
口唇の透明感（自然の仕上がり）	○	◎	◎	○	×
口唇のつや	◎	◎	◎	○	×
使用性（べたつき）	×	○	○	○	×
使用性（のび）	×	○	○	○	×
臭い	○	○	○	○	○

【0043】表3の結果より、黄色酸化鉄被覆雲母チタンを1～30重量%含む本発明にかかる実施例5～7の口紅用組成物は、口唇の縦皺が目立たなくなり、透明感があり、自然の仕上がりが見られ、口唇のつやも良いことが分かる。また、使用性（べたつき、のび）、臭いいずれも優れていることが分かる。これに対して、黄色酸化鉄被覆雲母チタンを0.5重量%配合した比較例7

は、口唇の縦皺が目立たなくする効果を生じない。また、使用性も悪いことが分かる。40重量%配合した比較例8は、口唇の透明感、つやが全くなく、使用性も悪いことが分かる。

【0044】

【表4】

	比較例		実施例		比較例
	9	8	9	10	10
セリンワックス	12	12	12	12	12
マイクロクリスタリンワックス	1	1	1	1	1
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	残余	残余	残余	残余	残余
12-ヒドロキシステアリン酸 2-ヘプチルウンデシル	0.5	1	10	10	10
重質流動パラフィン	—	—	10	10	10
マカデミアナッツ油脂肪酸 コレステリル	—	—	—	10	10
水添ロジニソステアリン酸グリセリル	—	—	—	—	10
黄色酸化鉄被覆雲母チタン 色材	10 5	10 5	10 5	10 5	10 5
口唇の縦皺	△	○	◎	○	○
口唇の透明感（自然の仕上がり）	△	◎	◎	○	×

口唇のつや	×	○	◎	◎	◎
使用性（べたつき）	○	○	○	○	×
使用性（のび）	×	○	○	○	×
臭い	○	○	○	○	○

【0045】表4の結果より、屈折率1.45～1.50の油分を1～30重量%配合した本発明にかかる実施例8～10の口紅用組成物は、口唇の縦皺が目立たなくなり、透明感があり、自然の仕上がりが見られ、口唇のつや、使用性（べたつき、のび）、臭いいずれも優れていることが分かる。これに対して、屈折率1.45～1.50の油分を0.5重量%配合した比較例9は、口唇の縦皺が目立たなくさせる効果及び口唇の透明感が弱く、口唇のつや、使用性（のび）が悪いことが分かる。40重量%配合した比較例10は、口唇にべたべたした感じが強くなり、使用性も重く悪いことが分かる。また、口唇の仕上がりも自然でないことが分かる。

## 【0046】

## 実施例11

(成分)	(配合量)
セレンシワックス	12
カルナウバロウ	1
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	残余
マカデミアナッツ油脂肪酸コレステリル	30
メチルフェニルポリシロキサン	10
黄色酸化鉄被覆雲母チタン	30
赤色202号	5

## 【0047】

## 実施例12

(成分)	(配合量)
セレンシワックス	12
カルナウバロウ	1
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	残余
重質流動パラフィン	20
メチルフェニルポリシロキサン	10
ジメチルポリシロキサン	5
黄色酸化鉄被覆雲母チタン	5
赤色202号	5

## 【0048】

## 実施例13

(成分)	(配合量)
セレンシワックス	12
カルナウバロウ	1
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	残余
2-ヘキシルデシル-12-ヒドロキシ オクタカノエート	5
メチルフェニルポリシロキサン	5
ジメチルポリシロキサン	5
黄色酸化鉄被覆雲母チタン	10
赤色202号	5

## 【0049】

## 実施例14

(成分)	(配合量)
セレンシワックス	12
カルナウバロウ	1
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	残余
水添ロジンイソステアリン酸グリセリル	20
メチルフェニルポリシロキサン	5
黄色酸化鉄被覆雲母チタン	10
赤色202号	5

## 【0050】

## 実施例15

(成分)	(配合量)
セレンシワックス	12
カルナウバロウ	1
トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン	残余
マカデミアナッツ油	10
2-ヘキシルデシル-12-ヒドロキシ オクタカノエート	5
重質流動パラフィン	10
メチルフェニルポリシロキサン	10
ジメチルポリシロキサン	5
黄色酸化鉄被覆雲母チタン	10
赤色202号	5

【0051】実施例11～15の口紅用組成物は、いずれも口唇の縦皺が目立たなく、透明感があり、自然の仕上がりが見られ、口唇のつやも良いものであった。また、使用性（べたつき、のび）、臭いいずれも優れていた。

## 【0052】

【発明の効果】本発明により、口唇の自然の仕上がり損なうことなく、口唇のしわを目立たなくし、且つ口唇のつや、使用性、長期保存安定性に優れた口紅用組成物を提供することができる。



フロントページの続き

Fターム(参考) 4C083 AA121 AA122 AB431 AB432  
AC012 AC021 AC022 AC331  
AC332 AC421 AC422 AC792  
AD152 AD491 AD492 AD531  
AD532 BB11 BB25 BB26  
BB60 CC13 EE01 EE06 EE07